

# 令和7年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【見沼小学校】

⑥	次年度への課題と学力向上策
知識・技能	異集団経年比較及び同集団経年比較でみると、若干の差異はあるものの、一定の学力(基礎・基本)は定着していると考えられる。しかし、学習から時間が経過することで、学習内容を忘れてしまう等、確実に定着していない。そこで、今年の実践も大切にしながら、定期的な復習を行い、より確実な定着につなげていく。また、継続して全国学力・学習状況調査やさいたま市学習状況調査の結果分析を行い、授業改善の取組を行っていく。
思考・判断・表現	「知識・理解」同様、昨年度までと若干の差異・増減はあるものの、児童の「思考・判断・表現」する力は身に付けてきている状態である。来年度も「プログラミング教育」を軸として学校課題研究をすすめ、児童に合わせた実践を継続することで、「思考・判断・表現」する力がより確実なものとなるように取り組んでいく。

①	今年度の課題と学力向上策	
	学習上・指導上の課題	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	<p>&lt;学習上の課題&gt; 正しい漢字の読み書きや言葉の特徴や使い方(国語)、加減乗除の計算や図形(算数)等に係る基礎・基本の定着に課題がみられる。</p> <p>&lt;指導上の課題&gt; 確実な定着を図るための、反復・習熟の十分な時間の確保。</p>	⇒ 基礎・基本の定着のため、毎週水曜の業前活動「スタディタイム」の実施。「ドリルパーク」や「スタディサプリ」等、ICTを活用し、児童の意欲向上を図りながら、継続して基礎学力の向上を図る。【年間を通して毎週1回実施。市学習状況調査の知識・技能に係る平均正答率の経年比較】
思考・判断・表現	<p>&lt;学習上の課題&gt; 文章から必要な情報を的確に読み取ったり、問題に対する考えや説明を正確に書いたりすることに課題がみられる。</p> <p>&lt;指導上の課題&gt; 児童が主体的に課題に取り組むことのできるための指導・支援の充実。</p>	⇒ 授業において、課題解決のために児童が主体的に判断し、考え表現する時間を十分に確保していく。また、協働的な学びの実践を通して、考えたり、考えたことを伝えたり、まどめたりできるようにしていく。【年間を通して、単元ごとに最低1回は実施。市学習状況調査の思考・判断・表現に係る平均正答率の経年比較】

⑤	評価(※)	調査結果 学力向上策の実施状況
知識・技能	B	週1回の業前活動「スタディタイム」において、「ドリルパーク」や「スタディサプリ」を適宜活用して、児童の基礎学力向上に努めた。また、「ドリルパーク」内のAIドリルも併用することで、個々の苦手分野の克服へとつなげることができた。さいたま市学習状況調査における知識・技能に係る平均正答率の経年比較では8項目中3項目で向上した。残り5項目についても、昨年度同等か若干低い結果であった。今年度の取組が、学力向上につながっていると考えられる。
思考・判断・表現	B	実施の難しい単元もあったが、各教科の授業において、児童が自分で考え表現する活動の積み重ねを行った。学習形態も個・ペア・グループ等、児童自身で選択させながら、考えたり伝えたりまどめたりする活動に取り組んだ。さいたま市学習状況調査における思考・判断・表現に係る平均正答率の経年比較では8項目中3項目で向上した。残りの項目については、ほぼ昨年度同等の結果であった。ICTも併用することで、児童自身が様々な方法で考えたり表現したりすることができるようになってきた。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	国語では、「我が国の言語文化に関する事項」の問題に若干課題がみられた。問題文や選択肢を正確に読み取り、適切な解答を選ぶことが難しい傾向にあると捉えることができる。算数では、図形の定義や数直線上に示された分数の読み取りにおいて課題がみられた。基礎的な部分の既習事項の定着が不十分であることが原因だと考えられる。理科においては、身の回りの金属の電気を通す性質や磁石にひきつけられる性質を問われる問題において課題がみられた。全体的には、理解できている状況ではあるが、基礎・基本を問われる問題での誤答率が目立つことから、既習事項の定着に課題がみられる。そのため、正しい知識・技能を身に付けることができるように指導を継続していく。
思考・判断・表現	国語では、問題文や選択肢を適切に読み取る部分の誤答率や無解答率が若干目立つ結果である。算数では、グラフの読み取りや比較、単位分数に関連した問題等に課題がみられた。理科では電気の回路において正答率が低い結果であった。今回は三教科とも、特に記述式の問題における誤答率や無解答率が目立つ状況である。問題を読み、与えられた条件を含めるように解答を記述したり、提示されたグラフ等を読み取って解答を記述したりすることに苦手意識がみられる。引き続き、学年の実態に合わせて、授業中の書く活動を丁寧に行っていくようにする。

①結果分析(管理職・学年主任等)

②詳細分析(学年・教科担当)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	各教科の「知識・理解」における平均正答率は、学年によって若干の差異はあるものの、概ね良好な結果といえる。国語では、指示語や漢字、敬語等における定着が不十分な部分が見られる。文を正しく読み、前後の関係性を適切に捉えることへの苦手意識がうかがえる。漢字や敬語については、日常での使用頻度が低いことも要因だと考えられる。算数では、式がどんな場面を表しているのかを正確に読み取ることができていない状況がある。国語同様、問題文と式の意味をそれぞれ正しく理解して、結び付けることに課題がみられる。社会や理科においても、基礎・基本にかかっている部分でのつまづきがある。既習時に内容を理解できても、知識の確実な定着に課題がある。
思考・判断・表現	算数においては、各学年良好な結果である。しかし、国語では、多くの学年で課題がみられる状態である。3、4年生では、話の中心が明確になるように話の構成を考える問題において、平均正答率が低い結果となっている。文の前後の関係性を捉えたり、順序を考えたりすることへの苦手意識がうかがえる。また、社会や理科では資料から読み取ったことを考えたり、与えられた条件から適切な実験方法を選択したりすることに課題が見られる。既習事項や生活体験を基に、問題に対して自分で答えを導き出すことへの苦手意識があり、複雑で長い文章題等に抵抗感がある児童も見受けられる。

③	中間期報告		中間期見直し
	評価(※)	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	B	基本的には、計画通りに「スタディタイム」を実施できた。活動においても、「ドリルパーク」や「スタディサプリ」だけでなく、必要に応じて児童の理解が低い部分のプリントを使用する等、実態に応じて取り組むことができた。今後も、児童の実態に合わせて、正しい知識・技能を身に付けられるように学校全体で取組を継続していく。	変更なし
思考・判断・表現	B	単元での実施は難しい部分もあったが、それぞれの授業で児童が自分の考えを書く活動を継続して実施できている状態である。学年に応じた取組にはなるが、書くだけでなく、互いの考えを伝えたり、複数人で協力してまどめたりする活動も行ってきた。今後も、継続して活動に取り組んでいく。	変更なし

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)